「おっと、待った」

親 分、 そいつはいけねえ、 先刻 待ったなしで行こうぜ

言ったのは、 親分の方じゃありませんか」

この大石が皆んな死ぬじゃないか。親分子分の間柄だ、そんな因業がはまま 言 ったよ、待ったなしと言 ったに相違な i s が、 そこを 切 5

なことを言わずに、 ちょいとこの石を待ってくれ」

言わ 驚 れ たなな た 親分だが、碁を打たしちゃ、 ア、 どうも。 捕物にか けちゃ、 からだらしがないぜ」 江戸開府 以 来 0 名

御 陽ざ 用聞 0 銭形 0 淡 11 の平次は、 縁側、軒の糸瓜の、怪奇な影法師が揺れる下 子分のガラッ八こと八五郎を相手

縁台碁を打っておりました。

行を極めた時 に も専ら 四世本因 が 行 の名人道策が、 わ れ た 頃、 7 度 今 日本 日 0 囲碁を黄金時 の麻雀などのように一時は 代に導き、 町方

心細 た音 聞 て も菓子 だらしがな、、、 かされて、  $\boldsymbol{q}$ のある がするという代物、 つ 11 石 折 のは碁だけだろう」 ですから、一石を下す毎 縫い 分です。 底 平次とガラ e st 物を は ^ 足を付 口が過ぎるぞ、 しなが 気 け ッ ら、 の 八 た i s ほ の 碁 す ど ( ) 女房 に、 はほ ガラ っか 0  $\phi$ り ポコ ッ 0 ん のお静も、 /気を腐ら の リポ 真似事 奴、 そ れ コ 手前などは、 に リと、 小半 カキ で、 お 碁盤 H 餅 り 間 0 ます。 と言 0 0 だら 音を うな 抜 け つ

平次も少しムッとしました。

マ れじゃ、 この 石を待 ってやる代り、 何 か 賭か けましょう」

「馬 鹿 ツ、汚な い事を言うな、 俺は賭事は大嫌 いだ

でなきゃア ć ý いでしょう、 竹箆とか、 餅菓子とか

が親 ょ しッ、 分で俺が子分だ。どんな事を言い付けられても、 それ程言うなら、 この 一番に負けたら、 今 日 文句を言わ 旦 お前

ないという事にしたらどうだ」

どうともしておくんなさい。 そ e s つは面 白 e s や、 あっ しが負けたら、 どうせ親分なん 打 つ かに な り 蹴<sup>ゖ</sup> 負け 飛と ば つ こがない す な り、

んだから」

「言ったね、さア来い」

二人は又、 怪しげな碁器 の 中の石をガチャ ガ チ 言わせて、 果

し合い眼で対しました。

「まア、 お前さん、 そんな 約 束をなす つ

お静は見兼ねて声を掛けましたが、

放 って置 け、この野郎、 一度うんと取 か締 め なきゃ ア 癖 に な る

碁で半日潰すのですから、 平 次は 一向 聞き入れそうもありません。 まことに天下は 江 戸一 泰平と言 番 0 つ 御 た 用 b 聞 が、 のか

もわかりません。

っさ ア、 あ りませんぜ。 親分どうです • 今更征の当りなん 中 が 死んで、 隅み が か打った 死 ん で、 目 つ て追 0 あ る 9 付 0 は

んですか」

「フーム」

身投げをするようなもので」 降う 参なら投げた 方が立派ですぜ。 この上もがくと、 頸を縊ぐる って

勝手にしろ、 -褌を嫌いな男碁は強し--ホヘピレ 一てな、 川柳点にある

通り、 碁 の 強 ( ) 0 は半間な 野 郎 に 限 つ たも のさ」

き付 平 けました。 次はそう言って、一と握 男前です。 御 用聞 には借 りの黒石を、 11 · 人柄、 碁さえ打たなきゃ ガチャ リと 盤は 0 ア、 上 **个** 吅 全

ッ ヘ ッ、何とでも仰 つ しゃ いだ、 今日一 日あっ が 親分で」

馬 鹿野 郎

親 分に 向 つ て 馬 鹿 野 郎 は な 11 ょう

すが 狭 といった 八五郎 着 て、 長 はそう言 11 人柄 鼻、 水髪の 団栗眼、 に見えるから不思議です。 刷毛先を左に いながらも、 間 伸 び 曲 長 0 げた、 *( y* 、顎を撫では た台詞 人並 廻しました。 何 0 風 な 俗 は を 情鼻褌 し てお 唐 桟 ん りま 嫌 を

丁度そ 0 時 でした。

御 さ いま 平 次親 分 の お 宅はこちら で 11 5 つ Þ 11 ます

か

切 り П 上 ですが • 鈴を鳴らすような美し 11 声 女房 0 お 静 はそ

れ に 応 て 取 次 に 出た様子です。

りや 武 飛 家 な 0) 娘だ、 だ大きな仕事かも知れな を言 が つ て 面 すっかり顚倒 白そうにガ ( ) ラ してい ょ ッ 八を顧みました るらし いぜ。 銭形 八 親 0 分、 ح 次

*p'* 

な

か

なか・

0

悪

*( )* 

ところがあります。

お 静 に案内され て 通 つ た の は、 十 八 九 の武家風 0 娘。 そ の 頃 0

う

ic

見

Þ

る

で

たも は せ 人 6  $\Box$ ですから、 もきけ 0 が か す 平 な つ 次 か す が *( )* り怯えて ほ 声 つ じ ど 昂 奮 を か り訓 聞 11 練され してお て 判 挨拶を済ませると 断 ります。 て立居振舞に たように、 胸を ど 少しの破綻 ん 抱 な 目 11 たまま暫 に もあ 逢 つ て り ま

嬢様、 どうなさ いま た、 大層驚 11 て 11 ら つ ゃ る 様 で す が

を慰めたことでしょ の若 の驚きを話します 次は 11 美 敷 物 11 女房 をす す 振 う。 りや、 め て、 娘は少し落着くと、 平次 11) た、 わ、 0 るよう 穏 ゃ か な調 にこう言 ほぐれるよう 子 は 11 ど ま 6 な た に 相 お そ 静

上は、 で御 召そうとなさいます。 父上 座 e s 0 ます めの 相沢半之丞と申します め と生きてはおられ お 助け下さ 一 応 ( ) は止めま ませ が、 ぬ したが ح 大事 申 します。 な 書 書面 面を 平 が 紛ん 次様 出 失っ て 来な て お な 願 *( )* 腹 以 を

「相沢半之丞様と仰しゃると?」

「大場石見様 0 用 人、 牛込見付外に 住 6 で お ります」

**|**フーム|

大場石見というの は、八千石を食ん で、 旗本 中 でも家柄、 そ 0

用人と いえば、 陪 E もの ながら相当 0 身分です。

す。外に頼るところもな 娘はそう言 つぞ や助 つ け て、 て 頂 後ろに慎ましく控え いた、 い身の上、どう 小 永井 浪 江 ぞ力 様 たお は 私 に 静 な 0 幼 0 9 方を、 友 て 下 達 さ で 訴え 御 (J ま 座 るよ 11 ま

御 武家方 0 紛紜に立入るいざこざ 0 は筋違 ( ) ですが、 兎 も角一 応承り ま

平 次 がこう 乗 ŋ 出 て < れ る ともう 力 で す。 娘 は 朩 ح

た様子で、語り進めました。

を文 付 を 若 ね 大 た ぬ 場 召 年 外 て 家 0 牛 箱 込 石 上 寄 柄 で 0 越え 見早 げ 屋 見 に で か 納 付 敷 す 5 5 速 罷 が れ 外 め て今日 と先ず 東照 ^ 入ろ 7 0 大場石 持 り 長 房 宮 う ち 出 下 州 11 0 帰 と 用 げ 間 て 0 御 受 渡 人 留 見 ら 所 11 墨す 領 う 相 取 さ ح せ め 附き 置 ま る れ 沢 に 11 歩手 ` 半之丞を る か う べ 苛斂誅 き こ と た れ 大 ま 前 が 筈 場 は ` 安祥 に し 家 に 0 た 求す 待 代 間 な と 0 が ち 違 理 ح 家 旗 つ ろ、 た 訴 伏 ح 宝 本 11 え せ は 領 0 0 ع そ て は 地 が 押 所 P 差 の 労 7 あ ツ 0 11 秀い P 途 出 騒 イ 11 0 う つ ぎも た た 押 で 中 た 昨 ` た め H さ 0 れ で 牛 御 果 0 め 品 墨 込 ま P に 兼 0 な た 見 附 せ

来る て、 武 士 相 陪 E もの 0 沢 半之 ح が 11 0 駕 丞 7 日 籠 主人 は まさかテ 典 K 乗る 型 の 代理 的 わ な ク け 用 として テ にも行きま 人です ク 歩 く が 御評定所 わ けにも せ 剣 W 槍 か 両 行 道 5 か 御墨 にも ず 附 そ を う 受取 た か 立 派 つ ( ) 7 9

ます 大事 困 乗 5 ح 9 た ず 0 経 品 験 を 済 0 受 唯 P W 取 な だ か せ 0 つ 弱身は て 9 11 来る た b 0) あ となると で る すが 生れ付き馬 で ょ 和 う、 馬 田 倉門 が で 今 行 嫌 までは 外 < *( )* で、 0 0 が 御 先 評 bず 定 番 つ そ 所 ピ ع タ 0 4 ^ た 行 身 IJ 分 9 め 柄 7

威 11 幸いわ う 名 11 好 馬 主 61 人、 男 南 を 部 大場石見は 附 産 八ゃ け 寸 て 貸 に (余る逸物) 大の馬好き、 て れ ま に ` たい 中間の た。 近頃手 0 K 黒 入 助 れ た  $\neg$ 東し 雲の 若 ع 11

0 基もと だ 沢 半之 9 た 丞 0 で す 嫌 ع P 言えず そ れ に 乗 つ て 出 か け た 0 が 間 違

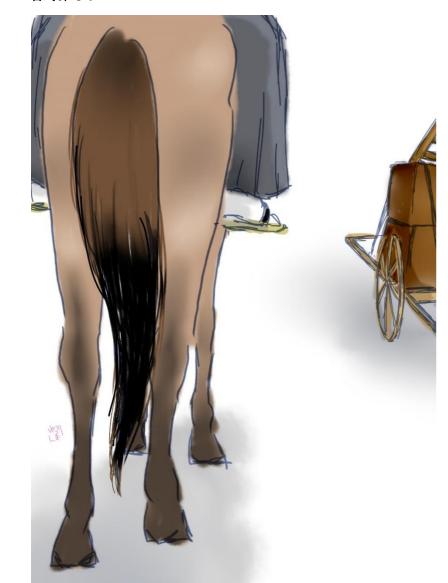
61

だのです。 文箱を捧げ加減に、片手手剛でっっで改めた上、持参の文箱に移して御評定所を退き、東雲に跨って、で改めた上、持参の文箱に移して御評定所を退き、東雲に跨って、よるのののという。 で来ると、 見付に出て、 相沢半之丞思わずホッとしました。 神楽坂を上ると、 あとは一と息ですから、ここま 何となく気が緩ん

=

半之丞の乗った栗毛の轡を取

「何だ」



©2017 萩 柚月

半之丞は御墨附を入れた大事の文箱を、 鞍ら の前輪に添えて 確か ع

押えたまま 黒 助 の指さす方を見や ります。

です 7 成程市 0 から、 ガラ か · ガ 谷 クタとも見える高荷を積んだ大八車。 に電話線のな 恰好が浅ましいばかりでなく、 の方から少しダラダラにな ( ) 時代でも、 その 上 った道を来る 車 へ三間梯子を積 0 動く 戸棚を二つ につれて、 0 は b重 だ グ 引 ね 越 ワ

ラグヮラと恐ろしい音を立てます。

旦 那様、 体 裁 は は 悪う 御 座 (J ますが ` 暫 < 我 侵な す つ て 下 さ 11

この馬は疳が強う御座いますから」

助はそう言 11 な が 5 法被を脱 e s で、 馬 の首 に 冠 せ そ の 下

から手を入れて、

「ドウドウドウ」

と鼻面から鬣をさすっております。

れ違 にな が ると、 いざま、 そんな事で宥 馬丁の法被をかべっとうはっぴ 梯子の先が められる 馬 なぐり捨てて、 0 東雲』 尻に 触 った で な 0) か 奔流 か、 つ た の 馬 0 如く は か パ ` 元 そ ッ と棹立ち の れ 道 とも す

ワーッ、ワーッ」

左往 と言う人声 に逃げ 惑な う 中を、 真昼の往 僅 に 来は断ち 鞍ら に 獅 噛が 割 み ったように二つに 付 11 た半之丞、 裂<sup>さ</sup> 必 死 て 0 右 手 往 綗

を絞りますが何の甲斐もありません。

旦 一那樣、 お 濠り だ ッ、 危な ( ) ッ、 降 り 7 下 さ 11 ツ

まだ轡をこ 放さ な か つ た 馬べっ 丁さ の 黒助 は 張 ŋ 切 9 た馬 0 首 0 下 か

ら必死の声を絞ります。

る で ヒ は 3 あ イ り ませ 見ると、 6 か 成程 |奔馬 は もう Ŕ 濠 の崖 ^ 乗出そうと 7 4

「あッ」

らぬ と言 半之丞は本 うちに、 地地 った方がよ 0 狂 0 当 如 か に 11 必 く に つ たで 落ちて、 死 狂 つ 0 た馬は、 しょう。 思 ( ) 水音高 で飛 大地に 降 二三十尺もあろうと思う崖 り 沈 ŧ 抛き ん た。 で り 出 しまっ されて、 1 ヤ た のです。 転 げ 起き上が ちた

「旦那様、お怪我は?」

「おお黒助、文箱を探してくれ」

「ここに御座います、旦那様」

「有難い、それさえあれば」

す。 ₽́ した。 落 体術 散る文箱 埃と 0 心得 泥 とに、 を取 が 確 つ 見る て差出すと か な ので、 影もなく 幸 ・ 塗<sup>ま</sup> れ 半之丞 11 大し て 押 お た 怪 り 一我も 戴 ます e st な が て 立 か ち上 つ 馬 た は 様子 が 手 り ま で

せん。 附 ^ 帰 の入 つ て つ 半之丞は 来ま た文箱を後 の醜体 した。 濠 に を 生大事 落ちた 何 時 ま に、 馬 でも の 始末を そこ 往 来 か 0 黒 らは 人 助 に  $\boldsymbol{b}$ に 見 う 任 せ せて 眼と鼻 る わ け 自 0 間 分 は は 0 御 屋 き 敷 墨

だら て次 の長 屋敷と言 け 屋 0 間 0 体 0 机 で、 つ ったところで、 0 て 上 衣 主君石見の前 に置 服を 改 11 た文箱を取 め 主君大場石見 髪を撫で ^ 出ることもありません り 上げ 付け、 のお長屋、 て驚きました。 さて 出 落馬をした埃 か け ょ 応自分

「あッ、これは?」

ます た 箱 紋も、 が は 違 よくよ つ て 鷹 0 11 く見ると、 羽 る が 0 何 で す。 時の 間 ま 紐なり る に 0 Þ 色、 つきり違 ・ら抱茗荷 高か 蒔絵え った に 品 な 11 つ で、 て 金ん 立蒔絵 厳重 似 は で 散 した 5 ŋ

筈の 顫る 封印もありません

う手先に

紐を払

つ

て、

蓋を開けると、

中は

空

つ

ほ

出さ に、 付 暫 落 **〈** 暫 れます。 馬騒ぎか く文箱 は夢見る心 を ) 隣室 5, 地、 自分の長屋まで辿り付 置 何の考え きっ 放 も出て来ませ したことなど e s た光景、  $\lambda$ が、 が やがて牛 は 着<sup>が</sup>え つ き ŋ 込 た 見 め

## 四

Ŕ 拘らず、大事のかから さえ ましょ わ も生きては 「こう言う訳 し東照宮様 格別 公儀に う。 御沙汰もなく、 御先祖 睨 いられません」 で御座 ま 0 御墨附を失っては、 御墨附を頂 れ 大場甚 て 41 ( J ます。 る 内様、 大場家は 御目こぼ いたば 御墨附が出なければ、 大坂夏冬の陣に抜 かりに、 明 しになりま 御使者に立った父相 日とも言 この度御 わ こした。 ず 群 御 そ 所 0 取 領 御手 潰 う 沢 0 で そ 騒 な 半之永 れ 柄 を現 あ あ あ ら 動 に に n 7

娘お秀、 涙なが らに こう 語 り 進 みま た

た。 だけ 八千石の 平 次 大 旗本  $\boldsymbol{b}$ お 静も、 が 潰ぶ れ 八五 る 郎 か 立  $\phi$ 息も つ か、 吐 か 人 ず 0 に 命 神 幾 妙 つ に に 聴 b 関か わ り る事

御驚 切 べ 「父上は、 き命を永らえ、 つ \$ て 0 出 中 て 主 に 来 \$ る 君 ح ^ 三日だけ猶予を頂きました。 0 恥じを忍 11 う 申 品 訳、 で は御 んで 腹を切 御墨附 座 11 ろうとなさ ませ 0 ん。 行方を探そうという覚悟 いました せめて三日、 主君に が 申上げて、 腹は 死ぬ 掻<sup>か</sup>

を定めたので御座 います」

ろもな れ見当も付きません。 「と申しても、 ( ) 親子、 主従 どこに隠されたやら、 の 難儀 平次様、 で御 お 座 助け下さ います」 誰が 摺り換えたやら、 ( ) まし、 外に頼るとこ 掻がく

します。 涙が、 お秀はそう言ってしまっ ポ 口 ポ 口と落ちて、 て、 その桃色珊瑚を並べたような指を濡 畳に手を突きました。 血 0 ょ うな 5

ば 御 ょう」 用聞や手先が お嬢様、 如 何にもお気 お手をお上げなさいまし。 口を出すべき筋では御座 の毒で御座 います、 思 御武家の 11 いませんが、 切ってお引受け 内輪事へ、 お話を承れ 申 町 方  $\mathcal{O}$ 

きっと挙げた平次の秀麗な面。

「え、それでは引受けて下さる、 何と御 礼を申して宜 4 ら

お秀はもう涙です。

があっても、 を自由にさして頂 をお含み下さいませんか、 に至るまで、 「あ、 お嬢様、 私 御屋敷内の方を縛りは 今からお礼は早過ぎます。 0 都合で、 いた上、 何時でも物を訊けると 上は大場石見様 私は町方の岡 しませんが、 つ つ から、 引 いては、 ですから、 下 いうことに 三日の間 - は馬丁、 馬丁、 これ どん だ 出 け 入り 下女 の

愛く 「それからもう一 てならない子分ですが、 つ、 ح の 野郎 御覧 は 八 0 通 <u>F</u>i. 郎 り ح 申 間は少し甘く出来 しま じて、 私 K は 可

「それはもう」

名馬罪あり ります」 「親分」

で

お

ります。

ガ ラ ッ は横か ら口を 出しました。 人間が 甘 いと言 わ のが

不服だったのでしょう。

ます」 より、 さい すか あ か 男を差上げますから、 黙 良 つ、 しが子分に まし、 つ 、鼻を持 て わ か e s 0 ろ、 野郎を看板にして蔭で繰った方が、 りません。 になるという賭をいたしました。 っておりますから、 大丈夫で御座いますとも、 ところ 最初 私だと思 でお から私が乗出 嬢様、今日一日この八五郎 って、 どうか いろ したら、 して、 人間は甘くても、 いろ御相 私 反っ 曲 御墨 の代 者 て仕事が運び 談 に りに、 附を嗅ぎ出 なす 用心させる が 親 なかな っ て 下 分で、 この

れません お秀は不安心そうにガ が、 どうもあまり賢そうな人相 ラ ッ八を見や りまし で はあ た。 ŋ ません。 鼻は 良 *( y* か 知

五

即で 刻云 八 Ŧi. 郎は 牛込見付 外 0 大場屋敷 ^ 乗込みま

とい よう。 ・う名 千 石 相沢半之丞の権力はたい 相ふ 旗 応さ 本の わ しから 用人といえば、 ぬ 堂々た るも したもの、 小大名の家老に のです。 そ 0 住居 も 匹 敵 で の で の で き b するで お 長屋

「父上様、 次の子分の八五郎という方を伴れ て 参りました」

「左様か、 私 は 相沢半之丞じ や、 宜しく頼みますぞ」

恐 ろ 四 恰好 ( ) 心配 デ 打ち ッ プ ひ IJ た が 武 れ 弌 て、 人品 さすがに顔色が鉛 骨柄 に は 申分あ のように沈ん ŋ

## 「ヘエー」

した が 五 郎 折 0 角来た つぶ 5 な b 眼と 0 を追 長 4  $\epsilon \sqrt{}$ 返 顎ざ すわ が け す に つ は か 参りま り半之丞を落 せん。 胆 させま

ど 0) よう に し て b 構 わ ぬ 三日 0 間 に 御 L 墨附を捜 ざが し出 貰 11

たいし

ヘエー

を伸させる の 万七と な 八五郎 舞 台 は定 e s ^ た つ た め 石 代 通 理 で しょう。 ع り事 意 地 件 て 0 :を 遡 悪 立 た 11 上に 岡 せ て つ 9 引 < て 考え 0 れ た 11 まし な 0 は 11 た。 ところで、 石 原 平 次 0 利 が 存分 こん 助 Þ な 腕 大

「何なと聞くがいい」

と半之丞。

れ で は 伺 11 ます が `` 見付 で 落 馬 なすっ た 時 は、 文箱 はどうな

りました」

持 つ て () た が、 生 得 馬 が 嫌 11 で、落馬  $\boldsymbol{b}$ 生 れ 7 始 め て だ から、

大地 に 膝を つ e st た 時、 思わず取 り落 した」

拾 上 げ た 時 変 つ て は ( ) ま せん で した か

4 Þ 変る 道 理 が な 11 0 眼 0 前 で 黒 **助が拾** つ て、 土埃を払 つ て

渡してくれたのだ」

から 歩 11 て 11 ら つ Þ る う ち に、 摺 ŋ 換え ら れ る よう

は御座いませんか」

マ 6 な 事 は あ りよう筈は な 11 で は な 11 か

お 帰 ŋ な つ 7 暫 隣 0 御 部 屋 0 机 0 上 に お 置 き に な つ たそ

うじゃ御座いませんか」

着換 0 うち、 暫 く 目を 離 た が そこ に は 召 使 0 者 が 見 張 つ て

いたし

「その方に逢わして頂けませんか

いとも、 ح れ、 お 組を呼んで来るが e s 11

ハイ

お 秀が立 つ て 行 くと、 入 れ 換か つ て二十 0 召 使 とは 見え ぬ

美しい女が入って来ました。

「お召で御座いましたか」

の人が ~訊きた いことがあるそうだ、 何 でも真 つ 直 ぐ に お

するのだぞ」

「ハイ」

容色で、髪形、 静 かに一礼 銘 して上げた顔 仙 の小袖、 何となく唯の奉公人ではありません。 は、 その 辺の 商売 人 に b滅 な 11

「この方は、 御女中で御座 いますか、 旦那」

「フム、まず女中だ」

「まず女中とは?」

「家内に先年死に別れて、 何彼と身 0 廻 りの世話をさせて る

そう言えば立派なお妾で す。 八 Ŧ. 郎 は 日本 のも っともらしい

顔をして、この女を見据えました。

生れは?」

「房州の知行所の者だ」

と半之丞が引取りました。

「何時頃御奉公に上がりました」

「もう三年位になるかな、お組」

-ノ

「旦那、 々そう旦那 が 仰 つ Þ つ ち Þ 何 に もな りませ ん。

の

御女中 · の 口占 · から、 11 ろ e s ろ の事を見付け 出す 0 が、 私 の 方 の 術<sup>で</sup>

「左様 か な

ガ ラ ッ 八 0) 半間 な調子と、 そ れ を精 杯 b つ ともら する言

葉に、 相 沢 半之丞 P 少しうん ざりし て お ります。

ところ で 御女中、 文箱はお前さん の 目の前で摺 り 換ո え 5 れ た筈

だ、 この 辺で何もかも 申上げたらどうだ」

ح ガラ ッ 八、 思 11 0 外 突 つ 込 ん だ事を言 *( )* ま

「えッ、

そんな、

そんな事は

御座

いません」

お 組 0 顔 はサッ と 血 の気を失いました。

落 馬 た時 に変らず、 道中 で変らなけれ ば、 旦 那 が 寸 眼 を

でお前さん した時、 が摺り変えるより外に変りようがな -お嬢様が御手伝 いをして着換をして ( ) いる時 では な 隣 11 か 0 部 大 屋

事な時だ、 よく考えて物を言った方が 11 いよ

歯<sup>は</sup>が 遠慮 愛に は、 行 に 半之丞父娘 洞<sub>ば</sub>れ 思 0 (J ことに な 娘 わ た ず 0 11 唇 視 ガ 相 思 P 線を避け を噛 ラッ 沢半之丞、 って娘の み、 八 そんな にこう言わ 半之丞 て首うな垂れました。 事を疑 お秀が さす は が にそ 今 、平次へ れ わ ると、 更な な う 11 が ع で 頼 敷居 断 は み込 定 あ 際 りま 取 bん 返 に 出 せ 聞 だ 来 0) ず、 6 付 で が て か そ 41 な る れ お う。 お を 組 成 又 0

六

「どうだ 11 八 親分」

•

よ 全 く 願 いだから、 『ガラッ その と言われた方が、 『親分』だけは止しておくんなさい。 まだしも清々する位 殺生だ 0

た。 帰 つ て 来た八五 郎を迎えて、 平次はこん な 調子 で 話 か け

「それじゃ、ガラッ八親分」

お悪 いや もう碁の相手は御免だ」

気 0 弱 ことを言うなよ、 ところで首尾はどうだ *(* \

「上々さ、 自慢じゃねえが、 あっしが乗込むと、 一ぺんにカラク

リが解ってしまいましたよ、親分」

、層鼻が 11 4 ね、 曲者は見る 当だけでも付 11 た 0 か

「見当は心 細 いな、 動きのとれな いところを押えて、 白状させる

ばかりに運んで来ましたぜ」

「ヘエ――、少し可怪しいぜ、八」

に縁 れから知行所から呼んだ下女のお組というの 「こう言うわけでさ、相沢半之丞は三年前に配っれ され を切 は大変な美い女だが、 つ て、 田舎へ帰すことになっていますぜ」 お嬢さんと折合が悪 を妾に 間に死なれる e s 0 して 近 e s た。 て、 11 うち そ

「成程」

嬢さん ら、 落も罪もな 相 て 「文箱を 判 手 り切 誰が考えたって曲者は П った曲者を挙げさせようとしたのは、そんなわけですよ」 くて暇なま 寸 からは騒ぎ出 妾だ 0 間 け 見張 になる腹 に、 って [せない。 判 お り 11 e s せに、 きって 組 た に 0 極 は、 わざわざ平次親分を引張り出し ちょいとそんな悪戯をしたが、 e st っているようなもの ても、 間 違 11 もなく、 お秀さんとか そ でさ。 いうお

五郎は少ししたり顔でした。成程、それだけの話 なら、 平次

を引 張 り出す迄もなく、 ガラ ツ八 でも事は済みます。

「ところで、 そのお墨附というのは見付かったのかい」

と平次。

んなに責めても、 「そ れが判らな e s から不 お組というお妾は 思議 だ、 御 墨 知らぬ 附 が 存 見 ぜ 付 ぬ か 0 るどこ 点張だ。 ろ か ど ね

親 分、女というものは、 思ったより剛情なも 0 じ やあ りません か。

顔を見ると、 一もう一つ訊くが、 そんな大それた事をしそうもな 文箱は念入りに検べたろうな」 ( ) が

「見ましたとも」

塗り 一か紐に汚り れは な か つ た か į, 土 か 砂 0 付 11 た 跡 が

「そんなも 0) はあ ŋ ゃ しません、 舐な めたように綺麗でしたよ」

し ム し

位拭

たって、

泥

いか埃が

付いている筈でしょう。

だ

から家

落 馬 した時 持 つ て 4 た 箱なら、 往 来へ 取 落 たと言 う か 5

持 って 帰 つ てか ら摺 り換えられたに間違 いありません

ガラ 八も見よう見真似でなかなか穿 ったことを言

「ヘエ」

「これは、 思 つ たよ ŋ 底 0 あ みら 11 ぜ、 P う

るとしよう

平次は考え深そうに 腕を拱きました。

底 b蓋 た に P, ح れ つ き り 0 話 じ ゃ あ ŋ

そうじゃな *i*, お 前 は駄目ば か り詰めて、 肝 腎 ル じん の筋 は

石を打たなか

ったんだ」

「ヘエ、譬が碁と来たね」

俺 はこれから、 ちょ いと行 って見てく . る。 用 事 が あ つ た ら 牛込

見付の辺へ来て見るがいい」

もう夕暮に近 41 街 <u>^</u> 平次は大急ぎに 飛出 しまし

そ れ から一 刻ば か b, 秋 の日はすっ か り暮 れ て、 ガラ ッ 八

在もなく鼻毛を抜 いていると、 牛込の大場石見邸から、

即刻、 平次親 分に来てくれるように」

と言う丁寧な 口上で使の者が来ました。

弱 ったなア、 親 分はどこへ行った か解りま せん が そ の 辺まで

行 って見ましょう。 牛込見付 のあ たり に ( ) る かも わか りませんか

ら

に出 ガラ て牛込見付 ッ 八 はそう言 へや つ 4 て来ました。 な が 5 使 i s 0 者と 緒 に、 神 田 か ら 九 段下

日月 薄 明 り、 幸 11 0 影 は Ŧī. 間 間 離 れ て b見 当 位 付

す。

「親分」

ガ ラッ 八 は 月 0 光にす か 声を 掛 け る 濠端 柳 0 幹き か ら

離れた影が、

「八か、何だ用事は」

紛れもなく平次の声です。

「大場様 から、 すぐ来るように つ て、 御使 0 方が見えましたぜ」

「そうだろう」

「あれ、待っていたんですかい

「まア、ね」

平次はそう言っ て、 何 やら手に 持 つ た物を懐に 入 れながら近づ

きました。

七

次と 奥座敷、 た。 通 ガラ さ れ た ح ッ 八 4 0 は、 は、 つ 7 *p'* 四<sup>ぁ</sup>たり 相 沢半之丞 庭木 の様子 戸 か 0 0 物 5 長 屋 々 廻 し で つ さに、 は て なく、 縁 側 思 わ に 本 ず か 家 ギ 0 大場  $\exists$ ま ッ 石 9 た 平 見 0

弓 る お 上 庭先に げ 0 0 組 折 た で ع す。 れ 0 11 番手 手 で う は 打た 0 が 桶ゖ 半 ·裸 体 れ 荒筵を 雁字がんじ た り、 の美女。 敷 芝居の責をそ ら め *( y* にさ て 言うまでも そ れ て、 0 上 の 儘 なく 水を 0 枝 0 拷う تتم ブ 用 間もん ッ り か 相 0 良 け 沢 か 半 け 5 11 之丞 松 5 れ に た 吊っ 7 0) 妾 41 ŋ

平次か」

٤, 少し 0 知 縁 行所 越 側 縁 に立 先 た 筋 百 平 った 姓を泣 次を 張 つ 0 当分 た は、 か 神経質な武家、 大場石見、 せた疳癖は十分に窺 に 見比べた姿は、 八千石 刀を提げて、 苛斂誅求 の当主 わ れます。 でし で 松 よ **う**。 が 長 枝ぇ 間 Ŧī. 0 お 組 を

ヘエ」

う う を ゆ な 絶 る 用 0 女に 責 人相 つ 0 め よう は 沢 取 を 易 半 ŋ を 之丞 開 あ 11 かせる が、 え して見た ず か 其で それ 5 術で 方を 何 bが で P あ は 呼 か ろう、 御 b び 剛 墨 情 聞 に 附 ゃ 我 11 何 慢 た。 つ 0 とか 行 た で 方 何 Z 致してくれ」 ん だ。  $\boldsymbol{b}$ 0 とし 永久 女を 商 に解 売 申 ても言 商 受 売 るま け わ て 4 ぬ と言 かよ あ 命 ら

「大場家の 大事だ。 首尾よく御墨附の在所が判れば、 礼は存分に

取らせる」

もたげまし て唇を噛みました。 何 とい う が嫌な言 たが、 e s 草 千 でし 石 0 よう。 大身の 平次は疳 興廃 に 拘 る の虫がムカ ことと、 胸 乙 をさす カと首を

「どうじゃな、平次」

先御 願 拷問に 11 ます 用聞 やなりと 0 役 目では御座 i s は、 牢番 与 いません、 力配下 の 不浄役 恐れながらそ 人 の 仕 の儀は 事で、 手前 御容赦を 共手

挙げた面魂は、 平次は屹と言 寸毫も引きそうになかすんごう (J 切りまし た。 沓<sup>くっぬぎ</sup> の上にこそ膝を突きました ったのです。 が

浮 打っ 沈 フ て打ち据えい 関ることじ <u>ن</u> <u>ک</u> そうか、 ッ、 や、 なかなか立派な口をきくのう。 黒助は水を掛けるのだ」 捨て置くわ けには参らぬ。 半之丞、 が、 大場 打 0 家 つ 7 0

「ツ」

 $\boldsymbol{b}$ 初 匂 秋 馬べっ 丁ら ( ) 0 そう 肌 寒 黒 です。 助 4 は 風 立ち上が が 半 裸 つ の美女を吹いて、 て、 番 手 桶 の 水をザ そのまま燻蒸する湯気 ブ ノリと掛 け た。

「半之丞、打てッ」

「ハッ」

分 相 妾 沢半之丞、 の 肉に を、 弓 ピシ の 折 'n れを取 ピ シリと叩きます。 つ て立上がると、 三年越寵愛 た自

一あッ」

丰 リキ リと空に 廻るお 組 0 り身体は 塊 の 綿を東 ね たように、

高

鳴

絶え入るば か りもがき苦し みます。

「まだ言 わ ぬ か 女

堪え兼 ねて大場石見、 刀 を提げたまま庭に 降り立ちました。

殿様、 お怨を申、 します」

何 ?

不意に、 縛 られ た 女の 声 を 聞 く ٤, 大場石見は愕 然ん とし 振 ŋ

仰ぎました

も構わず、 永 11 間 0 非道な 無法 な 御用 な され 金 を仰 方 の せ付 酬さ 11 け と た は 上、 思 e s 厭 ま が せ 6 か の 対けれて 年 に、 々 0 不 知行 作

何 何を言う」 所

の百姓は食うや

食わ

ずに暮してお

ります」

軽 11 人 気味」 親は子を売り、 0 怨み、 て 改えき 公儀 重け 0 夫は 御とが れ ば 腹 女房に別れ で め は免れ P 切ら て、 な て \$ け れ 泣 か ば 御 墨 な な 附 り (J ま が H とて すま 紛 失 は 11 な た 上 11 お は お 何 11

に 酔 縛 つ られた美女、 た ょ うな笑 月光 11 声を立 に 人 てる 魚 0 ように 0 で 光る 0 が 力 ラ 力 ラ 血 潮

。 お 前 は 何だ」

殿様 とし 様 百 房州 に 取 0 0 てする 我儘 る嘲笑。 怨を思 あ 0 百姓 る つ と贅沢 だけ て、 か 11 知 0 娘、 知 0 心 つ る にあるこ 事 に て が は る b殿 様 者 11 な そ P に 61 13 とが 近付 れ 機 な 水、 P 嫌 11 **気褄を取** 解 筈 内輪 いて 水、 ŋ 怨を ま に せ 朩 め しただ た。 報さ りま て 水、 腹 11 御墨附は私が死ねば、 け、 た でも た。 ホ e s ば 切 罪は十が十まで 相 か つ 沢 り 様 に、 は 多勢の 用人 相 沢

御

胸

0

中は

御察

申

ております」

も上 お 一納を軽 組、 それは考え違いだぞ。 く て頂 く 御墨附 0 殿様にはよく 在所を言え <u>ッ</u> \_\_ 申上げて、 く れぐれ

相沢半之丞、 思 わず立ち上が って、 松が 枝に 吊っる た 縄 取 り

すがりました。

誰 が言う b 0 か 見 る が 11 11 ح 0 邸 に ~ ン <u>~</u> ン 草 を 生 Þ て

やるから」

「お組ッ」

でも 唇 黒 助と石 切 か ら つ は た ク b 見 が ワ 0 か ッ • ع 4 血 吊 に 潮 5 な が れ つ 流 た て 縄が 駆 れます。 け 丰 付 IJ け 丰 ま IJ た が、 廻ると、 縛 5 れ お 組 た まま舌 0 白

八

る口もな 平 次、 何 11 が、 ع か 御墨 な 5 附が ぬ bな 0 ζ か て 0 は お 大場 組 が 0 死 御家は断絶だ ん で ま つ て は、 開 せ

押え は ても して捜が 約束 な か て した筈は し出 つ の三 た筈だ」 間 す工夫はな b 日 な な 目 < e s は 0 主 過ぎて、 君 八 Ŧī. りも ^ 申上 郎 とか言 0 今 げた だろうか。 日 は うの b 0 だ う が気が か 七 まさ ら、 日 目 付 御 か で 墨 く お は 一附を始 ٤ 組 な は 11 か。 直 ぐ取 焼きも 末 す 何 つ て

うすることも H 目 相 沢半之丞、 ح れ 以 出 上 折 一来な 愚 図 入 か 愚 つ つ て 义 た 平次に ので て、 しょう。 頼 公 儀 み込みまし 0 耳 にでも入 た。 お つ て 組 は、 が 死 全 ん で七

「それ では何とかしてく れ ぬ か。 拙者も腹を切るにも 切ら ぬ 羽

目だ」

うに 0 間 半之丞 どれ 決 だ は け緩和 て 思 悪意 わ ず 吐息 0 な て来 を ( ) ことを平次も たことか 吐きました。 ح 知 0 主 り 悉< 君大 人に (場石 して は、 11 お 見 た 組 の のです。 が言 暴 圧 を つ たよ 永 年

「旦那、私にはよく解っております」

「何が」

御 墨附 は 焼 きも 摿 て P ま せ 6 が 0 儘 で は 決 て 出 つ は

ありません」

「どうすればいいのだ」

「お人払いを願います」

平次の 物 々 11 様子に、 半之丞は立 つ 7 縁 側と 隣 0 部 屋 を 覗 き

ました。

「誰も聞いてはおらぬ」

督を先代様 御墨附を手に 御ざ 入れ 嫡 男なん るに 今 は別 は、 居 大場石見様 7 11 5 が つ 隠 居を遊 Þ ば 大場采女様 して、 御 家

お譲りになる外は御座いません」

「えッ」

平次は大変な事を言い出しました。

長 11 間 0 無 法 な 御政 治 で、 御 領 地 0 姓 が 命 を捨 て て お

よう 組 が 出 ع 思 て来ることは、 9 てお ります。 解 り こ の 切 ままに ったこと して で 御 置 座 4 いま て は、 ょう」 百 人千

お

「フーム」

御 当 歳な になられた甥 主石見様 は、 の采女様に御家督を譲らなけ 先 代 0 御遺言 通りに遊 ばせ ば、 れば 三年 な ŋ ませ b 前 ん。 に

が

まだ御墨附が出て来ません。

私は七日 がかりでこれだけ の事を調 べて参りました」

届が にな 「この儘 出て ります 来ま に 時 が し よ **う**。 経 て ば と月とたたな 御 城 0 目 安箱 か 11 5, うちに、 大場 御家は 家御 墨附紛失の 御 取 潰

すか べば、 かったので 女様を家督に直すよう、 殿様 平次の言葉には、 憚りながら、 石見が 石見様は一日も早く御隠居遊ばして、 す。 隠居するか、 御墨附はその 妥協も駆引もありませんでした。 呉々も御すすめ申上げます。 この二つより外には道があ 日のうちに私が捜して参ります」 本当 の御跡 大場家を潰っ それさえ運 りそうもな 取、 采

た石見様 「旦那様、 0 悪業 大事な 0 場合 た めに、 で御座 大場 ( ) ます。 0 御家を潰 後見人か して はな ら御当主に りません」 直ら れ

す。 重 ねて言う平次 の言葉に、 相 沢半之丞も漸 う なず 11 た 様 で

九

沢半之丞と平次が説明役になって、 な 0 悪 って 事 件は一挙に片附 11 大場石見は隠 本当の嫡男、 いてしまいました。 居する事に決 先代の子采女が入って家督相続をしました。 ŋ 家 のため、 すぐさま 翌る日親類が寄合 諸 公 人のた 儀 に 届と め、 *( )* 評判 相

女が登城して、首尾よく御目見得を済ませた 晚、 大場家 奥

には、 采女と相 沢半之丞と平 次が首を鳩 めておりました

「平次、 P う 御墨 附を捜してもらえるだろうな、 それを機 に 拙者

も身を退きたい」

自 分 の 粗忽 か らこ の 騒 動を惹 起 し たと 思込 ん で *( )* る 半之丞 は

心の底からそう言うのでした。

私 も今晩あた りは、 御墨附をお返し申上げられるかと思 e st

恐れ 入りますが、 馬べっ 丁らの 黒助を御呼び下さいますように」

な注文ですが、 半之丞はすぐ人をやって、 黒助を庭先 ^ 呼び

寄せました。

「黒助に何か用事か」

若い采女は、平次の物々しさが、すっ か ŋ 気に入 った ようで

兄<sup>ぁ</sup>にい お前 の望みは遂げた筈だ。 大場 0 御家を 取潰す迄もある

まい。 辺 で 御墨附を出 したらどうだ」

ズイと出た平次、 縁 側 の下に蹲まる黒助を見下 ろしてこう言う

のでした。

「えッ、そりゃ親分」

黒助はギ  $\exists$ ッとして顔を上げました。 <u>二</u> 应 五 の ょ e s 若 4 者

黒 助 ع e st う名と は 似も 付 か ぬ 色白で、 身 のこ な b 何 ع な

ではありません。

「よく知 立 が 嵩 つ ているよ、 上納が滞っ なア、 黒 助 兄哥、 お前 さん の父さん は 御 用

金 み を 晴 ん だ上、 5 た さに、 お 前 て水牢 さ ん は 馬 で死ん 1 K だ筈だ。 な つ て、 厳 兄妹二人、 重 な 大

敷に 入り込 み、 妹 0 お 組 は 下女に な つ て、 用人の 相 沢様

たが 容り 貌; のよ 11 0 が 幸か不幸 か 到 頭側近く お世話 す ること

に な つ た。 これだけ の事を知りたさに俺は房州まで行 って来たよ」

と言 黒 助 11 当 は て ガ た ッ ク 0 IJ で しょう。 首を垂 れ ました。 平次 の言う事 が 図 星をピタリ

お前 来 相 て 水 は 沢 鉄 前 様 砲 が 0 心を拵えた、 晚 御 用 墨 意をしろと言 附 を受取 これだよ」 に 行 *( )* つ た 付 時、 け られると、 千 載 い 遇ぐ 0 早速青竹を切 思 *( )* だ つ たろう。 って

11 穴をあ て見せました。 平 次は そう け て 綿を 言 つ 巻 て 袖 いた棹を突込んだ、 0 中 か 5 七 八 寸 0) 青 番原 竹 始 節 的 0 ح な 水 鉄 ろ 砲 を出 さ

黒 助は 素 ょ り、 采女も半之丞も、 あまり の事に言葉もなく 互. に

顔を見合 せる ば か り で す。

被ぶ 文箱 耳に 意 見 0 せて、 付 ように 馬 した文箱を を摺 ま 水を入れ、 は で 耳 な その 来ると、 り ^ 、水を入 換え つ 下で水 た 摺 る 馬 馬 ŋ 換えたろう。 か 1 つも 0 れ 5 鉄砲 お 度 5 りだ 引 上手でな れ 越車 る 相 の水を耳 沢様 ったろう。 ح が 死 俺 通 が落ちるところを狙 4 ぬ に に 相 り は 沢 注ぎ込み、 か お 前 目 様を落馬させて、 か に は つ うま た。 見えるよう 折 を e s 思われる お前 折がなく 狙 つ どお は 法 被 <sup>は</sup>っぴ て つ に解 て、  $\neg$ り 御 東しの て 気違 る 予ね を 墨 雲の 牛込 附 て 馬 用 4 0 0

子分 は何ん 行 つ て の でもな 見 八 た <u>F</u>. 郎 を 見 いことだ 当を 相 沢 付 様 つ け 0 たよ」 御 た

長

屋

^

p

つ

て

俺

は

馬

0

荒

れ

た

場

所

手で

0

下

に、

ح

0

水

鉄

砲

を見

付

け

ば殺 罪を 付 け 妹 よう す 自 のお 6 分 組 が じ 身 は、 な Þ か に な 兄の仕業と覚 引 つ か た 受けて つ た が 死 縛ら  $\lambda$ だ って、 れたまま舌を噛まれ のは 文箱 見 上 げ の泥 た を丁 心 が 寧 け た だ に拭き取 0 で、 気 が り、 手 付 け 0

の 疑 何 11 ع  $\boldsymbol{b}$ *( y* 残 う りま 明 智 せ で ん。 ょ **う**。 こう説 き明 か さ れ て 見る ٤  $\boldsymbol{b}$ う 寸ん 毫さ

ら な 俺 は 11 ح 0 は 0 あ 手 で妹 0 ·石見だ」 へ水をブ ッ 掛 けさせら れ た。 畜生、 殺 て b ) 飽 足 た

黒 助 は キ リキ リと歯を噛 み 締 め て 11

つぞ

や、

妹

が

吊

ら

れ

た

松

ろう。 前 きされて、 が 枝 黒 0 助兄哥、 を、 故郷 この後は采女様が乗出して、 で 月 は 行方不明にな 遅 盆 怨 と 正 れ み 0 の あ 月 月の光に見上げまし る が 石 つ 緒 見 てしま 様は K 来たような騒ぎだ。 隠居 つ 御政治向きもよくなる た。 た。 敵は た上 討 つ 御 たも 親 妹 類 同 0 中 お じ か 組 5 ことだ 爪ま 弾じ お

「平次、御墨附は」

を持

って、

早

く

帰

る

が

41

と相沢半之丞。

ヘエ、 これ がそ の 御墨 附 で 御座 います」

文箱 次 0 間 高 々 0 縁 ح 結 側  $\lambda$ か 5 だ 紐ま ガ ラ で 以前 ッ 八 0 0 まま 八 五 望郎が、 0) を捧 黒塗金 げ 一蒔絵 お 能す 0 0 立 足 派 取 な ŋ

「あッ、それは」

とい

つ

た

調子で·

来

た

のでし

た。

沢様 て、 黒 助 故 黒 哥 郷 助 に ^ 済ま 帰 は 給金 ね てや え 0 が 残 つ 馬貴な て り お B < 御 の 中 ん 座 を なさ 11 探さ ましょ ( ) ま たよ う。 Ŧi. + 両ば そ れ か り持た ら 相

何 لح e s う横着さ、 半之丞が 呆ぁ れ 7 黙 つ て e st ると、 若 i s 采 女は手

文庫の中から二十五両包を二つ出 してポンと投りました。

「お 組 の墓でも建ててやれ」

黒助は 黙 ってうなずきました。 ح 0 若 て 艱難を た 新領主 に

楯を突く心は微塵もなくなっていたて た のです。

親 分、 鮮やかだ つ たね、 水鉄砲を袂から出 た 時 は、 音 羽屋 ア

と言 いた か ったよ」

お前が文箱を捧げ て 出た足取 りもよ か つ たよ、 ハ ッ ハ ッ ハ ッ

ッ この勝負は中押で俺の勝さ」

「違げえねえ」

黒 りました。家には、美し 平次と八五郎は、 は本名 主君大場采女と祝言しました。 沢半之丞は惜まれ 0 九郎 助に返って、 月明 な 11 が りの下を、 お ら身を引き、 静が寝もやらず 房州で百姓をした事 これは 朩 口 娘 酔 ズ に 加 0 持 減 ッ お ع 秀 で神 つ 後 は て 玉 田 は申す迄もあ 0 *( y* 話、 る 0 ^ 辿<sup>た</sup>ど 0 馬でっとう で つ す。 乗 てお 2

て

(編注)

作品 ます。 底本の が見られますが、 なる古典的な文学作品でもあり 中には、 ままとしました。 身体 本書が成立した当時 の障害や人権 ご理解、 に 著者が ご諒承 か かわ 0 故 る、 時代背景等が 0 ほどをお願 人でもあります 差別的な語 現代 *( )* 申 句 や表現 の は異 上げ で、

挿絵―萩 柚月

初 出 一才 ル 讀物」 昭和八年十月号 文藝春秋社

底本 月五 日初版 「錢形平 次捕 物全集」 第 巻 河出書房 昭和三十一 年五

編集・発行 銭形倶楽部



## 銭形倶楽部

http://www.zenigata.club/